

産地紹介

三芳町川越いも振興会

川越農業改良普及センター 江原 洋一

☆☆☆
彩の国さいたま

緑の大地に実る

とめ 富の川越いも

富の川越いもをお買上げたい方を多く見かけます。
武蔵野のおもかげをうに伝ふる三芳町上富の地で、愛情こめて
栽培しつくされた「富の川越いも」は、秋の味覚の代表です。
ご家族あなまでご購入ください。

埼玉県入間郡三芳町上富

東武東上線朝潮駅より	バス10分
西武線所沢駅より	バス20分
関越自動車道所沢ICより	5分

三芳町川越いも振興会

1 はじめに

埼玉県入間郡三芳町は、古くからさつまいもの産地として知られている。さつまいもの栽培は、江戸時代から約250年の歴史があり、質・食味のいいもの産地として江戸で評価を得ていた。昔から、「川越いも」といえば川越市及び南に隣接する市町で栽培されるさつまいものことを指し、特に三芳町の上富地域で採れるさつまいもは「富（とめ）のいも」として有名で、伝統あるブランド品として受け継がれている。

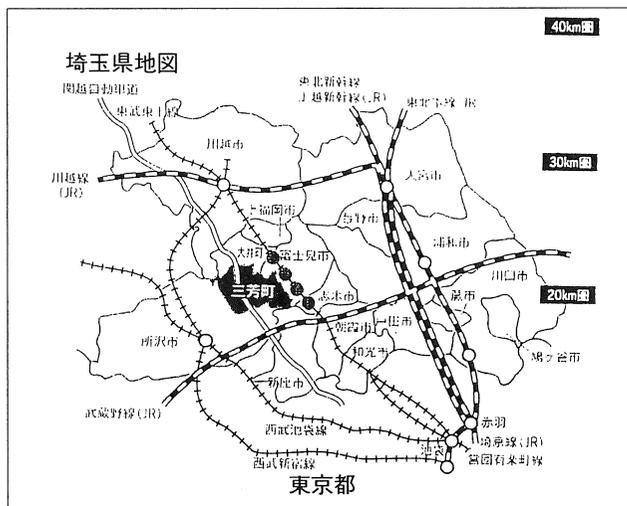
現在、伝統ある川越いものイメージアップと生産振興をはかるため三芳町川越いも振興会は活動している。

2 三芳町川越いも振興会の概要

(1) 位置と地勢

三芳町は、都心から30km圏内に位置する埼玉県南西部にある。形状は東西6.9km、南北4.2km、総面積15.3km²に及ぶやや紡錘形で、町域は西から東へと緩やかに下る勾配を持つ、おおむね平坦な台地である。

(2) 気象と土壌

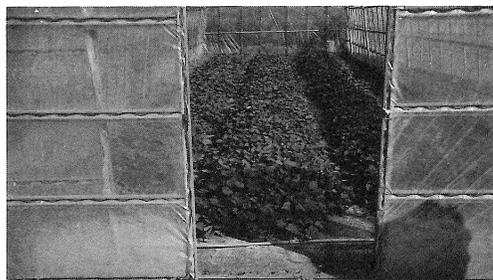


三芳町は太平洋岸気候区に位置し、温暖な気候で年平均気温は14.2℃、年間降水量は1,400mm強となっている。気象条件としては、冬は北西の季節風が強く、湿度の低い晴天の日が続き、夏は南風が多く高温多湿な気候である。

地質は、三芳町のほとんどは武蔵野台地という火山灰（関東ローム層）の厚く堆積した台地が占め、町の東部には柳瀬川などいくつかの小河川が流れているが、平坦で水に乏しい土地柄であった。

約300年前に行われた三富新田の開拓と入植者の努力により、当地の特産物である根菜類に適した農地となり、現在に引き継がれている。

(3) 産地の歴史



▲ウイルスフリー苗の育苗ハウス

三芳町上富地区は、約300年前に川越藩主「柳沢吉保」によって行われた「三富新田開拓」の一角である。水利に恵まれなかったこの地域は、乾燥に強い作物として、さつまいも、茶、麦類などが栽培されていた。特に火山灰土壌に適したさつまいもは、重要な換金作物であり、江戸時代には「川越いも」として名声を博した。

約100年前に、木崎村針ヶ谷（現さいたま市北浦和）で「八ッ房」種の突

然変異から食味の良い「紅赤（金時いも）」が発見され、またたく間に広まった。この品種によって一層川越いもの人気は高まった。中でも上富地域のさつまいもは品質が良く「富（とめ）の川越いも」と呼ばれ、市場で高い評価を得た。

三芳町は、紅赤の産地として成長してきた。しかし、昭和60年頃から多収性で栽培の容易な品種である「ベニアズマ」が全国的に普及し、栽培の難しい紅赤は減少してきた。ベニアズマの普及に伴い紅赤の市場価格も低迷した。

このため、さつまいもから収益性の高い葉菜類への栽培の移行が進み、川越いもの栽培面積は減少していった。各農家の販売方法も今までの市場出荷から、首都圏30kmの立地



▲三芳町4Hクラブによるサツマイモ作付準備（H13年5月）

を活かした庭先販売や生協・デパートなどとの契約栽培、生協出荷へと多岐にわたるようになった。

(4) 三芳町川越いも振興会の結成

減少するさつまいも栽培に歯止めをかけ、個々で生産販売していたさつまいもについて、「川越いも」としての栽培振興を図るため、平成4年12月、地元農家30軒で「三芳町川越いも振興会」が結成された（事務局：三芳町役場産業振興課）。

平成12年現在、31戸の会員によって構成され、地域特産品として栽培技術の向上・販売促進・農業後継者育成などの活動を行っている。また11月には、町の産業祭において共進会が実施されている。

3 経営の概要

(1) 経営農用地面積と農業労働力

現在、会員31戸のさつまいも栽培用の農用地は3,013aである（平成12年度）。さつまいもの平均作付け面積は、97aで、多い人は200a、少ない人で20aである。

会員の多くは、さつまいも以外にもニンジン、サトイモ、ダイコン、ホウレンソウなどの根菜類や葉菜類を2,409a（平成12年度）栽培している。

経営主の平均年齢は53歳で、40歳以下の経営主も4戸ある。また後継者が就農している



▲さつまいも栽培ほ場（H12.6.2）

農家は12戸あり、若い世代の多い生産者集団である。

農業従事者は、ほとんど夫婦で従事している。就農後継者も多いため、1戸当たりの平均農業従事者数は2.8人で、農業従事日数は1人平均250～300日となっている。

ほとんどの農作業は自家労力で賄われており、ごく一部で収穫時の調製や荷造りなどで臨時に雇用を入れている。

(2) 施設と機械・器具及び営農資金

振興会として共同で設置したり、購入した施設や、機械・器具はなく、多くは個人所有となっている。一部グループによるトラクタ、深耕ロータリー、フレールモア等の共同購入がある。

さつまいもの栽培面積が比較的多く（150a以上）、機械化一貫体系を実践している会員では、表1のような施設と機械を装備している。

会員の多くは庭先での直売が多いため、さつまいもの選別機や出荷調整用のキュアリング施設などは装備していない。

(3) さつまいもの生産費と販売額

さつまいもの標準的な規模（120a）での生産費を表2に示した。

減価償却費、肥料費・農薬費の順で多くなっている。会員の多くは主要な機械を計画的に更新し、効率的に利用している。種苗費は種いもの伏せ込みによる育苗が多いためやや少ないが、品質・収量アップのため、今後ウィルスフリー苗の導入が進めば種苗費が増えると思われる。

表2を参考に10a換算すると生産費は178千円で、販売額及び取得は個人差があるが、試算結果では概ね425千円、247千円である。

4 作付、肥培管理の概要

三芳町川越いも振興会でに行われているさつまいもの作付体系は表3のとおりである。

【品種】品種は紅赤が50%、ベニアズマが40%、その他の品種が10%という構成になっている。会員によって品種構成は異なり、紅赤100%やベニアズマ80%といった会員もいるが、紅赤は共通して全員が栽培している。

【育苗】育苗は種いもを伏せ込んで採苗する従来からの方法とウイルス感染による帯状粗皮病対策のため、ウイルスフリー苗をパイプハウスで隔離育苗しながら採苗する方法も増えている。

ア. 落葉による踏み込み温床育苗

従来から行われている方法で、床枠をつくり、そこに随時落葉をためてゆく。種いもの伏せ込みの10日前までに、米糠を混合して踏み込みを行い、発酵・発熱させる。

イ. 電熱温床による育苗

ウイルスフリー苗の隔離育苗で主に用いる方法。パイプハウスにトンネルを設置し、その中に電熱線を引いた育苗床を設けて育苗する。育苗床設置の手間や施設費がややかかるが、天候に左右されず順調に生育する。2月頃から育苗を開始し、少ない苗から多くの苗を増殖できる。

ウ. 無加温育苗



▲さつまいも収穫作業(H12.10.11)

表1 会員の主な施設と機械装備

種類	規模 (面積、性能、数量)	取得価格 千円
パイプハウス	100m ² 1棟	270
堆肥盤	115m ² 1基	693
貯蔵庫	1式	2,260
トラクタ	32PS, 17PS 2台	4,242
ロータリー	2台	877
フロントローダー	1台	822
ライムソー	1台	720
マニュアルスプレッダー	1台	635
マルチ同時土壌消毒機	1台	550
トレンチャー	1台	800
ブームスプレーヤー	1台	2,000
つる刈り機	1台	400
自走式収穫機	1台	1,349
トラック	1t, 軽トラック 2台	2,520

電熱温床による電熱線を使わずに、省力・低コストを目指した方法。簡便で、採苗本数も増えるが、低温などの気象に左右されたり、育苗期後半（5月上旬）から気温が急に上昇すると、徒長苗になり易い危険性もある。

【床土】床土材料は、前年の発熱材料（落葉・米糠）をよく腐熟させて使用する。床土には施肥は行わないが、苗の素質を良くするために過磷酸石灰を7kg/床土6m³程度施用する。

【伏せ込み】種いもの伏せ込みは3月中～下旬に行う。床の踏み込みが終わって7～10日後に発熱してくるので、発熱を確認してから



▲収穫直後の紅赤

表2 さつまいもの生産費

(120 a 規模)

費 目	金 額 (千円)	備 考
種 苗 費	74	種いも、ウイルスフリー苗
肥 料 費	270	
農 薬 衛 生 費	239	フェロモン含む
諸 材 料 費	78	ビニル、灌水チューブ、ポリマルチ、フェロモントラップ等
動 力 光 熱 費	67	
賃 料 ・ 料 金	35	水利費等
小 農 具 費	33	
包 装 資 材 費	225	ダンボール箱
そ の 他 諸 雑 費	128	租税公課、共済掛金、作業衣など
減 価 償 却 費	983	大型機械
合 計	2,132	

肥料は全量基肥とし、堆肥は作付け前の早い時期に施す。紅赤の場合、堆肥を除いた3要素の成分量は、10 a 当たり N が0.9、P が17.4、K が11.7 (硫加を入ると21.7) となっている。
イ. 定植準備

当地域では、土壌病害(つる割病、立枯病)の発生が多く、うね立マルチ内の土壌消毒を実施している。

床土を15cm位均一に敷く。この上に種いもを押し込むように伏せ込んでいく。終了したら、種いもが隠れる程度に覆土し、灌水して完了する。

【採苗】節数10~13節、草丈25cm前後で採苗する。(ウイルスフリー苗も同様)。

【定植準備】

ア. 施 肥

本圃での肥料は表4を基本的な施肥量にしているが、ほ場条件によっても大きく左右されるので注意を要する。

うね立には、うね立・マルチ・土壌消毒が同時にできる作業機を使用している。

【植え付け】

植え付け時期は、5月中旬から6月上旬である。植付け方法は、斜め挿しがほとんどである。移植機は、4戸の生産者で導入されているが、ほとんどは手作業で行われている。

栽植密度は、紅赤でうね幅120cm、株間40~45cm (1,850~2,080本/10 a)、ベニアズマではうね幅120cm、株間30cm (2,780本/10 a) にしている。栽植本数は、県内の他産

表3 作 付 体 系

項 目	月 旬 別																																			
	2月			3月			4月			5月			6月			7月			8月			9月			10月			11月								
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下						
1. 育 苗																																				
ア 種いも伏せ込み	○○————××××																																			
イ ウイルスフリー苗(温床)	○○○○▲▲▲▲————××××																																			
ウ ウイルスフリー苗(無加温)	○○○○▲▲▲————××××																																			
2. 本圃での栽培																																				
紅 赤	△△△△————□□□□□□□□																																			
ベニアズマ	△△△△————□□□□□□□□																																			
緑肥用麦類	-----> <-----																																			

○：伏込み・ハウス定植 ▲：順次挿し苗 ×：採苗 △：挿し苗 □：収穫

地（観光いも掘り園を含む）よりもかなり粗植になっている。

【栽培管理】本圃の管理としては、病害虫防除が中心となる。7月上旬から9月下旬にかけては、害虫の発生が多く重要な防除時期となっている。特に注意を要する害虫としては、コガネムシ類とハスモンヨトウが挙げられる。

使用薬剤は、表5に示したとおりである。コガネムシは、植え付け期のダイアジノンSLゾル散布と生育期の粒剤散布（1～2回）

で防除している。

ハスモンヨトウは、通常薬剤（ランネート、トクチオン、アグロスリン等）とIGR剤（脱皮阻害剤）のローテーションで防除を行っている。

【収穫・調製・出荷】

収穫時期は、早掘りを除けば9月下旬から11月下旬に作業が集中する。収穫は霜が降る前に完了するように心がけている。

掘り取りは、つる刈り機でつるを刈り取ってから、掘り取り機で掘る。掘り取ったいもは、運び易いようにつるを束ねて軽トラック等で家に運ぶ。

納屋や軒下に仮置きして、販売用に調製したり穴むろに貯蔵する。最近では、宅配便の普及により常時需要があるため、貯蔵庫を導入する会員も徐々に増えている。

5 販売

規格はJAいるま野の規格に合わせて、いもの重さによって、表6に示す5段階に分けている。また、A品・B品の区別は、形状によって区分するが、絶対的な基準は今のところはない。

A：品種固有の品質形状色沢を有する良好なもの

表4 さつまいもの標準施肥量

肥料名	施用量	備考
堆肥 (又はフトール)	600	○落ち葉を利用した完熟堆肥等を利用 ○肥料は全量基肥施肥。
根菜専用183 (1-8-13)	90	○畑の肥沃度に応じて窒素成分は調整する。 (ベニアズマは若干窒素成分を多くする)
粒状BMよりりん	30	○生産者によっては過磷酸石灰や硫酸加里を使用している。
硫酸加里	20	

表5 病害虫防除（使用農薬一覧）

防除時期	使用農薬	対象病害虫	備考
種いも消毒	ベンレート(水) 0.4%粉衣	黒斑病	種いもへ粉衣する。
苗消毒	ベンレート(水) 500倍液	黒斑病	挿し苗の基部10cm前後を30分間浸漬。
本圃消毒	D-D55 20リットル/10a	センチュウ類	マルチング同時処理。ドロクロールは挿し苗10
マルチ内消毒	ドロクロール 15リットル/10a	つる割病	～15日前に処理する。
植付期	ダイアジノンSLゾルM 25倍液100リットル/10a	コガネムシ幼虫	作畝前に処理。 作畝時に処理。 〃
	ダイアジノン(粒) 9kg/10a		
	バイジット(粒) 6kg/10a		
生育期	ランネート(水) 1,000倍	イモコガ	7月上旬頃からイモコガ、ナカジロシタバ、コガネムシ幼虫の防除。8月からはハスモンヨトウを中心に防除を実施。7～9月まで月2回程度。
	マッチ(乳) 3,000倍	ナカジロシタバ	
	トクチオン(乳) 1,000倍	ハスモンヨトウ	
	ダイアジノン(粒) 9kg	コガネムシ類	
	フォース(粒) /10a		
バイジット(粒) 6kg/10a			

表6 サツマイモの出荷規格

規格	規格重量
3L	1個600g以上
2L	〃 400~600g
L	〃 250~400g
M	〃 150~250g
S	〃 100~150g

B：Aに
次ぐもの
販売は、
庭先での直
売が主体で、
一部では生
協やデパー

トとの契約栽培なども行われている。庭先販売では、宅配便を利用した注文が増え、購入したイモの多くは贈答用に用いられている。また、年内にはほとんどの家で販売が完了する。

三芳町川越いも振興会では、「富の川越いも」と振興会のPRを兼ねて、①川越いもの歴史、②さつまいもの料理法、③会員の電話番号等を入れたパンフレットを作成し、販売用の段ボール箱に入れたり、訪れたお客さんに配布している。

また、庭先販売用の看板や旗を作り、県道沿いの会員宅の入り口に掲げることでさつまいもを買いに来るお客さんへの目印としている。

三芳町の生産者は、通常、観光いも掘りは行っていない。外部から体験農園などの依頼があった場合には臨時で対応しているが、それ以外は掘り取った製品の出荷や販売をするだけである。

6 経営と栽培技術の特色

(1) 経営上の特色

三芳町川越いも振興会では、伝統あるブランド品「富の川越いも」を守ろうといろいろな活動を行っている。

経営・技術の向上のため、品種比較や肥料比較、新しい資材などについて展示圃や試験

圃を設けて検討している。最近では、ウイルスフリー苗の栽培試験を重点に行い、収量・品質の向上に役立っている。

共通のチラシや段ボール箱、旗なども作り、ブランド品としてのイメージアップを図っている。

宣伝活動として、平成12年度は、町主催で、平地林での落ち葉掃き体験イベントが開催され、近隣市町の小学生や父兄に落ち葉掃きの実演や指導を行ったり、参加者に焼き芋を提供するなど交流を行った。三芳町産業祭及びJAいるま野の農協祭では、地元消費者に焼き芋の試食販売と「富の川越いも」をPRした。

(2) 栽培技術上の特色

ア. 土づくり

三芳町上富地区では、ほとんどの家で平地林（広葉樹）を所有しているため、平地林の落葉を堆積して堆肥として利用している。しかし、近年は平地林の開発などによって、落葉の確保が困難になっている。さつまいもの場合、家畜糞尿は窒素分が多いため堆肥として用いることができないので、米糠と粃がらを混合して堆肥化したり、大豆粕の利用、さらには緑肥の栽培など個々の条件に合わせて土づくりが行われている。

イ. 品質向上対策及び収量安定対策

ア) ウイルスフリー苗の導入

埼玉県で導入されているさつまいもは、ウイルスによる斑紋モザイク病などの病害に冒され、いもに带状粗皮症や退色症が発生して収量や品質低下の原因になっている。そこで茎頂培養によってウイルスフリー化することで、带状粗皮症や退色症が消失し、収量・品質の向上が可能となった。

イ) 連作障害等回避のための緑肥導入

上富地区では、さつまいも一作の畑が多く、連作障害が問題になってきている。そこで、麦類や線虫抵抗の緑肥作物を導入し、連作障害の回避に取り組んでいる。

ウ) 循環型農業への取り組み

埼玉県では、有機100倍運動推進促進事業によって、環境にやさしい農業を目指すべく、減農薬・減化学肥料栽培や有機栽培などを推進している。また、国のガイドラインに沿って、県独自の特別栽培農産物認証制度を実施している。

三芳町のさつまいも栽培においても、平成9年度からハード事業とソフト事業を導入し、減農薬・減化学肥料栽培に取り組んでいる。平成9年度からは、主要害虫であるハスモンヨトウとコガネムシ類の誘殺用のフェロモントラップを設置し、農薬散布の軽減を目指している。

その他、コガネムシ防除においてはダイアジノンSLゾルの利用がある。うね立て・マルチ張り前に25倍で散布し、耕うんする。薬剤の効果が長持ちするため、その後7月から8月にかけて1～2回程度の粒剤（ダイアジノン粒剤、フォース粒剤など）散布でコガネムシの食害は概ね回避でき、農薬使用回数も1～2回軽減できる。

ハスモンヨトウについては薬剤抵抗性がつき、難防除害虫になっている。現在のところ、畑を丹念に巡回し、若齢幼虫を見つけ次第、早期防除を行う必要がある。しかし実際は、食害が目立ってきてから防除をはじめるので手遅れになる場合が多い。そこでフェロモントラップを利用し、トラップへの誘殺虫数の変化を把握することで防除適期を判断してい

る。

ネコブセンチュウや立枯病の防除は、マルチ施設時にクロロピクリン剤（ドロクロール）を30cm間隔で約3cc注入している。これらの病害虫は連作に起因するものであり、緑肥の導入などによって回避しようとする動きがある。

エ) 新しい技術への挑戦

三芳町では、紅赤については上富地区で生産されたさつまいもの中から優良系統を選抜して、ウイルスフリー化を実施している。普及センターでは、生産者や関係機関の協力のもと品種比較のための展示を設置し、年末には振興会主催による系統別の食味検討会を実施している。この食味会をもとに、有望系統を絞り、品質の良い「富の紅赤」としてブランド化を一層進めてゆく方針である。

7 今後の方向

三芳町は、江戸時代から続く食用さつまいもの産地であり、現在でも30ha強の栽培面積を維持している。生産されたさつまいものは、収穫開始直後から年末まで庭先で販売されている。これからも産地として生き続けていくためには、消費者に支持される良品質なさつまいもを生産することと、農業後継者も多いことから町やJAと一体となった宣伝活動や情報発信、そして新たな販路の開拓も欠かすことができないであろう。

ハギ
盛り過ぎでは
風にも耐えず
咲きこぼる
庭のうえ

